

氏名	尹 政 旻
学 位 の 種 類	博士 (芸術)
学 位 記 番 号	甲博制第 47 号
学 位 授 与 の 日 付	平成 29 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 (課程博士)
学 位 論 文 題 目	映画における表現の手法と芸術性についての研究
作品テーマ	(映画) 映画表現のエンタテインメント性と芸術性 についての研究
論文題目	映画の演出における「動き」についての研究
論 文 審 査 委 員	主査 教授 大森 一樹 副査 教授 豊原 正智 副査 教授 中川 滋弘

内容の要旨

申請者である本大学院生、尹政旻 (以下申請者) の学位 (博士) 論文 (題目「映画における表現の手法と芸術性についての研究」) は、作品の長編劇映画『而立』 (テーマ「映画表現のエンタテインメント性と芸術性についての研究」) と、論文の「映画の演出における『動き』についての研究」からなる。

長編劇映画『而立』は、大阪を舞台にした三十歳の韓国人青年の挫折に至る物語である。韓国の貧しい工場労働者家庭で育った主人公ユン・チャンホは、絵が得意で高校時代その才能から美術部入部を勧められるが、父親の猛反対で断念せざるを得なかった。高校卒業後、二年の徴兵服務も終えたユンは、三十歳を前にして考え抜いた末、大阪にいる親友の林を頼って家族と離別することを決意、渡航し林の働く韓国料理店で仕事を共にする。そこでアルバイトの美大生、富永麻友美と出会い恋に落ち、思いを込めて

彼女の絵を描こうと筆を手にする。やがて二人は同棲し、幸せな日々の中で次々に絵を描き始めるユン。店に飾られた絵が客の画廊のオーナーの目に止まり、展覧会への出品の声がかかり、諦めていた絵の世界が広がり始める。そして麻友美の妊娠。三十歳にしてようやく手に入れた幸福は、しかし、その足元からゆっくりと崩れ始める。愚連隊からの借金の利子で店の売り上げを使い込んでいた林が、店長から店を追い出された挙句、ユンの展覧会の契約金まで持ち逃げして失踪。一方で友達の結婚式で仙台に行った麻友美は、東北で大震災に遭遇する。彼女は阪神淡路大震災で、目の前で母親を失っていたのだ。そのトラウマから大阪に戻った麻友美は、次第に精神のバランスを失って行く。友人の不祥事を店長から非難され、絵の理解者である画廊のオーナーからも見放され、さらには林の行方を探す愚連隊からの恫喝。そんなユンに、すっかり心が荒廃してしまった麻友美が「みんな悪いのはあんたのせいや」と暴言を浴びせる。ほとんど耐えられなくなったユンに、さらに追い討ちをかけるように韓国の母から父の死を知らせる電話。異国の中での不信、絶望、喪失感、完全に理性を失ったユンは、ついに麻友美を手にかけてしまう。警察の取調べで問い詰められたユンは、ただ三十歳の人生の重さに一筋の涙を流すだけだった。

いささか過剰すぎる悲劇の追い討ちのような展開であるが、完成した映画は、これでもかこれでもかと声高に叫ぶような所はなく、むしろ淡々とした語り口で最後まで見せる。申請者は、これが初めての映画製作の経験であり、監督として長編劇映画第一作となる。

研究論文「映画の演出における『動き』についての研究」は、序論、結語を前後に、三つの章から成る。序論は、本大学映像学科で映画演出の授業に五年間ティーチングアシスタントで参加してきた申請者が、映画の演出における「動き」の重要性に着目し、この論文のテーマとした導入が書かれている。それを受けて、まず第一章では、映画と動きが不可分の関係にあることを論じる。被写体の動き、移動撮影、ズームイン・アウトなどのカメラの動き、それらの映像を組み立てることが映画演出の基本であり、動きが演出家の狙いを具体的に構成し、表現の原動力となっていると考察する。さらに動き

の本質が、「現実性と身体性」、「感情的力と運動感覚」、「技巧」の三つであることへと展開（第一節）。また、映画がその動きにより、時間と空間の変身を獲得したことで新しい芸術に移行したことに触れる（第二節）。第二章では、ボン・ジュノ、デヴィッド・フィンチャー、アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥの三人の監督の作品を例に挙げて、新しい映画の動きの演出の手法を具体的に提示して見せる（※論文審査会では映画のその部分を実際に映写して解説を加えた）。第三章では、映画の動きの新時代を撮影機材の進化から論じる。カメラ移動車、クレーンによる撮影（第一節）。シェイキーカム、ウェアラブルカメラ（第二節）

そして結語で、映画の動きは、演出家と観客のコミュニケーションに深く関わるものであるが故に、映画の芸術的価値に必ず必要なものであると考えると結んでいる。

以上が、本論文の要旨である。

審査結果の報告

長編劇映画作品『而立』の概況については、「**内要の要旨**」で述べた通りであるが、韓国人青年を主人公にして異国の大阪を舞台に、親友との友情、母国の家族との葛藤、芽生えた恋人とのロマンス、巻き込まれる暴力組織のバイオレンスと、まさに映画のエンタテインメントとしての要素は充分である。また、その背景に日本と韓国という異なる文化、民族があることで、「社会派映画」の側面もあるのは当然のことであり、監督である申請者がテーマとしている「映画表現のエンタテインメント性と芸術性」の狙いは明確である。ただ、社会派であることが即芸術性であるかというのは、いささかの疑義があるかもしれない。

その点において着目するのは、「**内容の要旨**」でも触れた淡々とした語り口のことである。過剰すぎる悲劇の追い討ちのような展開を声高に叫ぶのではなく、むしろ単なる悲劇の連鎖に過ぎないとも言えるような語り口、それは極めて日本的な表現、「やるせない」としか言いようがないような。いささか個人的な思い入れになるが、韓国人である申請者の映画にそんな日本的な情緒を感じた主査の私は、人をして「やるせない

お」と言わしめた作風で知られる名匠、成瀬巳喜男（「乱れ雲」「流れる」他）の映画を想起した。成瀬作品が芸術として日本映画史に位置づけられていることは自明のことではあるが、ただ申請者から成瀬の名前を聞いた記憶はない。あるいは、韓国から日本に留学して8年になる、主人公と同年齢の彼のこれまでの環境が生んだ心象なのか、こちらも立ち入って聞いたことはない。しかしながら、そうしたことを踏まえて、この論文に接してみるならば、いくつかの発見があることは極めて重要なことだと考える。

被写体の動きを追うゆっくりとした移動撮影、動かない被写体へトラックアップする静かな動き、暴力場面の手持ちカメラによるロングテイク、それらは論文の中で申請者が、映画演出の基本であり、表現の原動力とする、映画の「動き」に他ならないのではないか。そして、それが『而立』と言う作品の語り口となっていると。だとすれば、この作品と論文の二つは、表裏一体となっているとも言えよう。論文を指導した豊原正智副査もまた、「論述の内容が実作者としての自らの制作の姿勢とも通底しており、実践的で、両者の乖離が感じられない」ことを指摘しており、「実作者としての自らの制作体験も踏まえ、具体的な作品分析を行い、映画における新しい『動き』の表現の可能性を提示できている」と論文を評価している。主査である私も、その点において、本作品と論文を評価する次第である。

中川滋弘、豊原正智両副査は、論文「映画の演出における『動き』についての研究」を以下のように評価している。

研究テーマの妥当性については、「映画の表現手段と芸術性を探求する研究テーマとして『動き』を取り上げたことは適切である」（中川副査）。「映画の本質を『動き』として捉え、そのことについて適切な文献の引用を駆使し、歴史的、理論的に論証し、『動き』が単に映像の物理的、視覚的な問題に留まらず、鑑賞者の感覚あるいは感情に関わる問題として『アニミズム的思考に誘導する』ものと論じている」（豊原副査）。

また、論旨の展開として二人が共に高く評価しているのは、具体的な監督、作品を取り上げた第二章「新しい『動き』の演出の手法」で、主査である私もこの章が「映画・映像」という研究領域ならではの、最もユニークな章であると考ええる。

「しばしば、この問題に関しては、評価の定まった代表的な映画作品が取り上げられ分析の対象となることが多いが、申請者は、最近の最も注目される監督及びその作品を取り上げている」（豊原副査）。「ボン・ジュノが演出する被写体の予想外の『動き』、『ピクサリ』と呼ばれる芸術性が既成のジャンル概念を打破して観客を新しい映画世界に誘導している分析は鮮やかである」「デヴィッド・フィンチャーが『ファイト・クラブ』や『パニック・ルーム』で展開したカメラワークが観客を現実の制約から解放して、人間の目では見ることのできない全知的な存在にまで高めていること。音、光、匂いまで表現していることの発見は斬新である」「アレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトウが『バードマンあるいは（無知がもたらす予期せぬ奇跡）』で映画の時間と現実の時間を一致させる工夫をして観客のイリュージョンと現実認識を融合させていることを分析し、その手段として独創的なロングテイクが使われていることを連続ショットを例示（※この部分は審査会で上映された）して成功している」（中川副査）。

その上で、両副査は次のように結んでいる。

「論理展開は妥当だった。『動き』が観客の意識に与える影響を考えることから始めて、芸術と娯楽の弁証法にまで論理を発展させていた。野心的な芸術的冒険がエンターテインメントの地平を切り開くことを、作家から受容者へ、個別から普遍へ、起点から未来へと視点を高めて論述して明快だった」「申請者には今後継続して映画研究を発展させるに足る資質が見出せる。研究者として活躍することを期待する」（中川副査）

「三人の監督を特に取り上げた理由が必ずしも明確でない（※この点は審査会の質疑応答で申請者が口頭で答えた）、『動き』の本質論が現代の映画に根底でどう関わっているか、新しい撮影の技術革新が今後どのような創造的な『動き』に関わっていくかということまで踏み込んで欲しかったなどの感想はあるものの、それらは今後の課題とするとして、本論文が博士課程（芸術制作研究分野）の学位申請論文に十分値するものとする」（豊原副査）以上から、主査である私と中川、豊原両副査の三人は、長編劇映画作品『而立』と研究論文「映画の演出における『動き』についての研究」が、一定の水準以上に達していると認め、これを博士課程（芸術制作研究分野）の学位論文に十

分値するものと認定する。